

東北復興宇宙ミッション

○長谷川洋一、福井昌平（一般財団法人ワンアース）

キーワード 東日本大震災 復興 国際宇宙ステーション 宇宙飛行士

【1】目的

我が国に未曾有の被害をもたらした東日本大震災発災から10年の節目を迎える2021年3月11日に、全世界への復興支援への感謝の気持ちを、国際宇宙ステーション(ISS)から発信する。この節



目には政府からも諸外国に向けてメッセージが発信されるであろうが、日本国民から地球市民に向けての感謝の発信と、震災の記憶と教訓を未来に伝承するためのメッセージを発信することが重要と考える。世界の注目を集めるため、ISSを放送局に、宇宙飛行士をアナウンサーに見立てた方法をとる。

【2】背景

この事業の構想は、同財団が進める復興支援事業「きぼうの桜」計画（第22回研究大会で報告済）で醸成された広域交流の中から生まれた。2019年7月、岩手県洋野町で開催された「きぼうの桜サミット」には13地域から約500名が参加し、「発災10年の節目には宇宙から、復興と感謝を世界に発信しよう」という共同宣言が出された。<写真・きぼうの桜サミットのフィナーレ 2019年7月 岩手県洋野町>

その後、コロナなどのブレーキ要因もあったが、山崎直子宇宙飛行士を実行委員長に迎え、被災地42市町村の参加を得（各首長を実行委員とする）、ワンアースが実施構想をまとめ、復興庁の「発災10年復興発信事業」に選定され、JAXAとフライト契約を交わし実現することとなった。



【3】内容

岩手、宮城、福島三県の被災地 42 市町村から、復興 10 年のイメージを語る笑顔の写真等を集め横断幕にして宇宙に打上げ、ISS の日本実験棟「きぼう」内に展示する。JAXA 野口聰一宇宙飛行士がその前に浮き、各地で公募された世界への感謝のメッセージを要約して読み上げる。この動画を 2021 年 3 月 11 日、全世界に公開する。

横断幕は福島県川俣町で織り上げられた薄絹で、同町の小学 6 年生 14 名が縫製した。



<写真・小学生たちが縫製した横断幕 福島県川俣町立福田小学校 6 年生全員>

一方、被災各地からの記念品(花や農作物の種等)を打ち上げる枠も設定し、各地とも趣向をこらしてもらう。これら記念品は地上帰還後、地域活性化や産業創生、そして震災の記憶と教訓の伝承に息長く役立てていく。

【4】期待される効果とレガシー

- ・日本から全世界への感謝の気持ちを市民レベルで発信出来る
- ・宇宙へ送る写真や記念品を準備するイベントが、各地を活性化する（特に子ども層）



- ・子どもの参加が得られ易く、大震災の記憶と教訓を伝承する構図が作れる
- ・東北の復興を広く世界にアピールし、風評払拭に貢献できる
- ・国際宇宙ステーション（ISS）の社会的価値の一端を証明できる（宇宙の文化利用）